

ざる説にしてとりがたし、字鏡集鯉音ハとみえ、コヒと訓せり、康熙字典に博雅を引て、黒鯉謂之鯉としるしたり、

〔世諺問答〕十二月 問て云、せつぶんのまめうつ事は、何のゆへにてかはべる、答としこしと世俗にいひならはして、こよひは悪鬼の夜行するゆへに、禁中にも、むかしは陰陽寮さいもんをよみて、上卿已下これををふ、御所にも、もし火をおほくともして、四目ありておそろしげなる面をきて、手にたてほこをもて、内裏の四門をまはるなり、また殿上人ども御殿のかたに立て、桃の弓蓬の矢にていはらふ也、これらをかたどりて、まめうちて鬼をはらふ事は、はじまれるにや、此内裏にて鬼をはらはれし事は、慶雲二年十二月、百姓おほく疫癘になやまされしゆへには、はじめられたるよし承およびし、

〔今川大雙紙^上〕様式法の事

一 御年男きん[○]勤[○]する事^略 中 節分の夜の鬼の大豆をも、御年男きんする也、

〔明良帶録^{世職}〕御臺所小間遣頭 節分にて御黒書院御白書院^江豆を納る、唱云、天長く地久しく日の下の鬼の豆福は内くくと唱へ、四方印紙之上に置く、

〔甲子夜話^{二十三}〕節分ニモ、御坐間ハ老中方豆打ヲ勤メラル、尋常ノ如ク、高聲ニ鬼ハ外、福ハ内ナドハ言ハズ、タゞ御上段ノ塗縁ニ豆ヲ三處ニ置キ、退カル、コレヲ豆ヲハヤスト云フ、但シ置クトキ祝文ヲ唱ヘラルトナリ、^餘又節分ノ日ハ、世ニ胴揚トテ、歳男ヲツトムル者ヲ、婦女打寄リドウニ揚ル、大城ノ大奥ニテハ、御留守居ソノ役ヲツトム、其事畢ルト老女衆列坐アリテ、御祝儀ニツキ、胴揚イタスト申達アリテ、女員打ヨリ、胴ニ揚ルトナリ、予ガ大叔父松浦越前守御留守居勤役シタリシトキノ物語ナリ、

〔半日閑話〕節分の夜、白大豆を黒く成程煎り、弦懸升に入れ、夫を箕に入れて持参し、福は内三聲、鬼